

## ドイツにおける市民仏教の広がり

坂井祐円

仏教とドイツというと、どれほど結びつくものだろうか。ドイツはヨーロッパなのだから、宗教や文化の背景はキリスト教であり西洋哲学であるとは普通は考えられる。少なくとも私には、「ドイツの仏教」というのが想像し難いものであった。しかし意外にも現代のドイツでは、アジア圏の文化が広く浸透しており、そのため、仏教も大変な勢いで受容されているのである。ドイツ北西部の町デュッセルドルフにある「恵光」日本文化研究センター（以下、恵光センターと略称する）もまた、日本の仏教文化をドイツに伝えることに貢献している所である。恵光センターは、独自に編集した『仏教聖典』を世界各地の主要ホテルや福祉施設などに寄贈するなどの活動を展開している仏教伝道協会のヨーロッパ支部で、その伝道拠点の拡充を目的として近年建立された仏教寺院である。

私は縁あって、恵光センターから奨学金を受けることができ、一年間ドイツに滞在するという好機を得た。この間に、仏教に関心をもつ、多くの異国の人々に出逢うことができたことは、私にとって何ものにも代え難い貴重な体験であった。この場をお借りして、心から恵光センターの方々に感謝の意を申しあげたいと思う。以下に述べる私の報告は、恵光センターを通して

垣間見えた「ドイツの仏教」である。

デュッセルドルフは、日系企業のヨーロッパ基地であり、日本人が多く住んでいる町として知られている。この町の一角に、周囲のドイツ風の建物とは雰囲気の異なった恵光センターがある。日本庭園や伝統家屋を備えたなかなか趣きのある寺院である。仏教伝道協会の創設者である沼田恵範氏が真宗の末寺の出身ということで、本尊は阿弥陀如来を安置している。普段は主に日本文化を紹介するイベントを主催しているが、宗教活動としては、彼岸会や盂蘭盆会などの法要や真宗寺院の行事である報恩講が執り行われる。また親鸞聖人のご命日勤行が、西本願寺の慣例に従って毎月十六日に行われている。日本人が多く住んでいる場所にもかかわらず、これらの行事に参加する人々はほとんどドイツ人ばかりである。

ドイツでは、浄土系の仏教はそれほど盛んではなく、禅やチベット密教、テラヴァーダなど瞑想を基軸とした仏教が流行している。この瞑想ブームは、今に始まったことではなく、一九六〇年代の後半くらいから広まってきた現象である。恵光センターでも、毎週金曜日の晩になると、ドイツ人のある座禅グループが集まってくる。

「なぜドイツでは瞑想的な仏教がもてはやされているのだろうか。」座禅の後、たまたま彼らと飲みに行くことがあった時、私はこんな疑問を投げかけてみた。ドイツ人は、ビールを片手に議論するのが好きである。彼らは、はるばる日本から来た

私の問いかけに、いろいろな答えを返してくれた。しかし同時に、彼らの中でも議論が始まってしまった。「教会への反発だ！」と誰かがまとめるように言った。意外な答えであったが、要は次のようである。ドイツでは教会税を払うことが国民に義務付けられている。彼らが、自らの宗教がカトリックであるかプロテスタントであるかを明確に答えられるのは、どちらの教会に税金を払っているかによるのである。瞑想を實踐し、仏教を学んでいる人々の中には、教会が政治と結びついて権力を握っていることが、ドイツ社会の悪化を招いていると考える人が少なからずいるようで、ドイツ仏教連合 (DBU) という大きな組織などは、政治的な活動もしているという。

私はもつと精神的な動機を聞きたかったのだが、全く予想外の答えが返ってきてとまどってしまった。しかし、根はどうやら繋がっているようである。

私は、「キリスト教は歴史的にヨーロッパの宗教性 (Religiosität) を担ってきたのであるから、あえて仏教にその代わりを求める必要はないのではないか」と改めて問いかけた。するとある人が、「Zen ist nicht Religion. (禅は宗教ではない)」と切り返して来た。「Zen ist eine bestimmte Art für mein Leben.」(禅は、私にとってある一つの生き方である) というのである。彼は更に、「Religion」とは、もともとキリスト教の概念であり、その原語であるラテン語の 'religio' は「Gottとの合一あるいは関係」を意味する。しかし仏教には「Gottと関わりうとする目的は全くないはずだ。」と説明してい

た。彼の主張によると、禅はいわばある一つの人生哲学ということになる。つまり、仏教は Religion というより、Philosophie なのである。これがキリスト教文化圏での仏教に対する一般的な位置づけであるらしい。ドイツ語では、キリスト教を Christentum と表現しているが、仏教は Buddhismus である。Ismus とは Idee (観念) を由来とした名詞を形成する接尾辞であり、ドイツ語の表現上、仏教は一つのイデオロギーということになる。それに対し、Fremd という接尾辞は、普遍的あるいは絶対的な宗教概念に与えられるのである。

その時、横で聞いていた女性が、「仏教が Religion であるかどうかはよくわからない。しかし、私は Religion よりも良い概念であると思う」という意見を述べていた。彼女によると、Gott は外からわれわれに命令してくる存在で、信仰するか否かの決断を求めているが、仏教では自己の内に Buddha-Natur (仏性) を発見するか否かであり、強制がないのだという。また、キリスト教がこれまで戦争の歴史を繰り返してきたのは、常に外にある絶対性を守ろうとしたからであり、反対に仏教は自己の中に真理を発見しようとする静寂な内省に努めるので、平和的である。それ故に、仏教は Religion すなわち「Gottとの関わり」よりも優れているのだというのである。

ヨーロッパで仏教が広く受け容れられている大きな要因は、やはり伝統的なキリスト教あるいは教会の権威への反動であるようだ。ドイツの著名な仏教学者シュミットハウゼン (Lambert Schmithausen) 教授も、「仏教は、西洋において体

制側ではないという点で肯定的に受け取られている」と述べている。<sup>①</sup>

恵光センターの座禅グループを指導しているのは、デュッセルドルフ大学で言語学を研究されているペーエ (Volker Beel) 教授である。ペーエ先生は、まだ大学に奉職する以前、京都大学でドイツ語を教えておられ、その時期に禅の魅力に惹きつけられて、天竜寺の僧堂でしばらく修行されていたという経歴を持っておられる。そのため、仏教全般についても、独自に思索されているようであった。先生は毎学期に、自分の担当するゼミナールの時間を一コマ活用して、仏教書の輪読と講義を行っていた。私も勧められて、参加することになった。

丁度私が参加した冬学期から、龍樹の『中論』を読み始めることになった。テキストとして、最近インド学の学術書として出版された『Die Philosophie Der Leere』(空の哲学)<sup>②</sup>を使用した。これは翻訳者の研究・注釈を含んだ『中論偈』のサンسكريット語原典のドイツ語訳である。参加者は、座禅のメンバーや、哲学科の学生などで、全部で一五、六名ほどであった。彼らの仏教の専門的知識はそれほど豊かではなかった。最初の数時間は仏教の入門書を使って大乘仏教全般について簡単に説明をすることになった。この段階からすでに活発に質問や意見が出て、例えば、涅槃と仏陀と菩薩の関係は、神とイエスと聖霊という三位一体の關係に近いと思われるとか、空の概念は物理学の領域で既に証明されているのではないか、

といったユニークな意見も飛び出していた。

ようやくテキストを読み始めたのは、ゼミが始まって三週間ほど経ってからだった。ペーエ先生の問題意識から、第八章の「アトマン (atman)」に関する考察(「観法品」)を読むことになった。先生は、仏教の特徴は「無我」であり、キリスト教など他の思想に全く無い考え方なので、そのことをよく分かってほしいと主張しておられた。講義は、参加者の意見が様々に噴出し、その度に先生も深く考え込むといった感じで、なかなか先に進まなかった。

次の夏学期に入ると、講義の補佐として、恵光センターの研究員であるレエリケ (Hermann-Josef Rollike) 氏が新たに加わった。彼は中国学 (Sinologie) が専門で、ドイツの教授資格 (Habilitation) を取得したばかりの若手の研究者である。彼が加わることで、サンسكريット語のドイツ語訳だけでなく、鳩摩羅什訳の青目訳『中論』のドイツ語訳も併せて参照することになった。サンسكريット語原典のドイツ語訳の意味が明確でない場合は、中国訳を見るという形式で、ゼミは進化した。

レエリケ氏の思想的背景は、中国思想でも仏教でもなく、西洋哲学であったようだ。ゼミの後、私はよく彼と一緒に仏教やその他の思想についてお互いの考えを話し合ったものだが、彼はエックハルトやハイデッガーの存在論と仏教とを対照することを好んだ。講義の中でも、しばしば西洋哲学の概念によって『中論』の文章を解釈しようと試みるがあった。そのせいか、根本的に仏教と西洋哲学とは相容れないと考えるペーエ先

生と鋭く対立し、聴講者をほったらかして二人で議論を戦わせることが何度もあった。

ペーエ先生とレエリケ氏の対立点は、空についての見解で一層はつきりした。ペーエ先生は、空を「瞑想時に体験する言語が全く断絶した境地」であると考えていた。それに対しレエリケ氏は、空を「ある種の包括的な存在」であると考えていたようだ。「言語を断絶する」とは、確かに仏教において真理を表現する一つの言い回しであるが、レエリケ氏はこの場合の断絶される「言語」には二類の区別があると述べる。例えば「*Ein spreche ein Wort*」（私は言葉を話す）という表現には、言語に関する語が二つ含まれている。*Sprechen*（話すこと）と *Wort*（言葉）である。彼の考え方からすれば、「断絶される言語」とは *Wort* であって、*Sprechen* ではない。言語行為は身体性や関係性を意味するので、これを否定することは「存在」の根拠を失うことになるはずだ」ということになる。これに対しペーエ先生は、「その考え方は西洋哲学の発想である。どのような行為であっても分別であり、空とは分別を否定することであるから全く違う」とおっしゃって、即座に座禅を組まれた。私は二人の議論を聴きながら、空のもつ深淵さに改めて気づかされたように感じた。空の概念を、瞑想時において立ち現れてくる境地であるとか、あるいは様々な行為の背後にある存在の根拠である、などと捉えることが果たしてその本意となるのか、私自身の課題として残ったように思う。

恵光センターで浄土真宗の行事が行われる時には、ドイツ各地や周辺地域から、真宗信者や真宗に興味があるというヨーロッパの人々が集まってくる。浄土教の思想は、すでに英語による著書が多数出版されているし、ドイツ語による入門書も少ないとはいへ、一般書店で購入できる。このような背景もあって、元牧師であったエラクレ（*Eckhard*）氏のように、独学で仏教を研究した後、親鸞の教えに出逢って真宗に帰依することを決意し、スイスのジュネーブに独自のグループを形成しているという方もいる。

私は報恩講の時に、南ドイツのある真宗グループと知り合いになり、二度ほど訪問する機会があった。「信堂（*Shin-do*）」という名のそのグループは、ドイツとオーストリアの国境にある、塩の産地として有名な町バード・ライヒェンハルが活動拠点で、メンバーは六名ほどという小さな会である。主催しているモーゼル（*Thomas Moser*）氏は、五年程前に西本願寺において真宗信者となった方であるが、なかなか意欲旺盛で、今後の信堂の活動プランを楽しそうに語っていたのが印象的であった。

モーゼル氏は非常に研究熱心で、真宗の教学についても専門的な語を巧みに用いながら理路整然と説明し、その博識ぶりには脱帽する以外なかった。もう二十年以上も前から禅やチベット密教などを学び実践してきて、ようやく真宗に落ち着いたのだそうである。真宗と他の仏教との違いは何処にあると思うかと尋ねると、それは「他力」の思想であるという。彼は、阿弥

陀仏の力によって生かされていることを実感すると、生きる活力が湧いてくるのだと語っていた。

またモーゼル氏は現在、ミュンヘンで活動しているDVA S[EN]という名の仏教を主軸としたボランティア団体の仕事を手伝っているという。このグループの活動はホスピスである。ガンやエイズ患者、寝たきりの老人などに付き添って話し相手になり、死への不安を少しでも和らげようというのが活動の主旨である。彼は、これがヨーロッパでの真宗のスタイルになると語っていた。

他にも彼は様々なイベントを企画しており、今年で三回目に「なる」という「Berg Tour」に私は参加させてもらった。これは、アルプスに囲まれた南ドイツの自然環境を活かした企画で、その内容は登山して、山頂で瞑想するというものであった。彼の説明によると、すべての生命存在が仏そのもの(Buddhaschaft)であるという仏教の考え方は、自然保護の教えであるという。またこの発想は、キリスト教が入る以前のゲルマン民族の宗教に似ており、ドイツ人は懐郷の念をもって受け止めているのだと付け加えていた。

こうした「ドイツの仏教」のいくつかの顔をのぞいていると、彼らもはや文化の一形態としてではなく、もっと本質的な活力として仏教を考えているように思えた。ドイツはかつて、内面的に強烈なキリスト教批判を行い、しかも外面的には、多数の外国人労働者を抱えたことで様々な異文化の影響を直接に受

けてきた。それ故、これまでのキリスト教文化の伝統を維持することがもはや不可能になっているのである。仏教はこのような状況にあって、キリスト教に代わる選択肢の一つであった。今やその仏教は、模索しながらも、独自の道を歩き始めているのである。

#### 注

- ① “DAO Das Asien-Magazin für Gesundheit und Lebenskunst / Buddhismus-Sonderheft” (DAO Zeitschriften Verlag KG, Hamburg, 1999); Lambert Schmithausen “Für eine ökologische Ethik” S. 9 訳文は筆者による。
- ② Bernhard Weber-Brosamer und Dieter M. Back “Die Philosophie der Leere. Nagarjunas Mūlamadhyamaka-Karikas. Übersetzung des buddhistischen Basistextes mit kommentierten Einführungen. Beiträge zur Indologie 28.” (Harrassowitz Verlag, Wiesbaden, 1997)
- ③ Max Walleser “Die Mittlere Lehre des Nagarjuna; Nach der chinesischen Version übertragen” (Heidelberg, 1912)
- ④ 前掲の Schmithausen 教授の論文の中でも、初期仏教の縁起 (Entstehen in Abhängigkeit) 思想や後期の仏性 (Buddha-Natur) 思想、密教の大日如来の考え方は、環境保護の原点であると述べている。